

法隆寺寶物考證

法隆寺寶物考證

甲斐國人

栗原信克著自筆

特別  
子1  
4511







法隆寺寶物考證目錄



古曜御劍

紺冠金泥梵網經

真鈴

御足印

六月鳴鑼

金剛子御咒珠

繡佛

衲袈裟

衲袈裟圖

聖賢瓢

梓御弓

象笏

麈尾

塗金銅佛



御靴<sup>三</sup>

琥珀御咒珠

御鉢

柄香爐

徑管

徑机

伎樂面

御磬

塗金長幡

御水瓶

錫杖

針筒

徑筒

油注

御香

竹表

廣東御褥

蜀江御褥

蜀江裂

夏御褥

御徽<sup>三</sup>

御几帳

小幡

青磁花瓶

達磨迦裳

紅牙尺

釣升

雷家琴

不蠶羯鼓

羯鼓味

洞簫

御帶

御刀子

青木香

漆革箱

獻物帳



不減貝辛攢

壺鏝

毯代

百萬塔

風爐

五色系交情

猿頰硯

水注

水匙

大量

鋸

燈臺

金山寺香爐

三鼓

朗詠要集

獵虎紋錦

七卷法華經

孝仁大德華法華經

東坡墨竹

還城樂面

簪

上官疏

石名取水火取玉

善光寺如來御書

貝葉梵書

鏡

竹樹



法隆寺寶物考證

七曜御劔

栗原信光編集

銅劔長一尺六寸廣九分弱厚一分五釐法隆寺  
 金堂<sup>コノトク</sup>に安置<sup>コノトク</sup>と<sup>コノトク</sup>於持<sup>コノトク</sup>國天王の劔と<sup>コノトク</sup>以鞆<sup>ツク</sup>黒漆皮<sup>コノトク</sup>  
 みる鞆<sup>ツク</sup>心<sup>ツク</sup>欄<sup>ツク</sup>金銅絲<sup>コノトク</sup>みる巻<sup>ツク</sup> 長一尺五寸五分  
 製他全く同く增長天王乃劔と<sup>コノトク</sup>以<sup>コノトク</sup>以劔相傳く  
 上宮<sup>シラカ</sup>法王御物と云<sup>コノトク</sup>以<sup>コノトク</sup>二天長<sup>コノトク</sup>口<sup>コノトク</sup>尺<sup>コノトク</sup>口<sup>コノトク</sup>寸木像<sup>コノトク</sup>云



光北月終る山口大口費上而次木開二人作也行  
藥師德保上而鐵師用古二人作也行とあり先  
輩審定シテとく山口大口々日本書紀白雉元年の  
條は是歲漢山口直大口奉詔刻千佛像とあり  
凡て二天像も白雉元年の紀ある處一と云ふ  
然る時は天保十二年より一千百九十三年前  
の像小く上宮法王薨御後三十年小なるり  
禁秘抄は太刀契匡房記顯實云鋒劔三尺或二

尺總十其中一劍北月有銘北斗左青龍右白虎其  
外不見とあり一と云ふ凡て劍一尺六寸強と小  
尺の二尺より一と云ふ北斗雲形以下の鏤紋ホリ龍虎か  
るや鮮明あり一と云ふ凡て若くは守屋征伐の時  
上宮法王に授らるる契刀か一と云ふ然る時  
は國家典刑の一品幸ふ今日も現存と云ふ見  
るを瞻仰セン尊重ソウと云ふ弘安元年閏十月圍城寺  
乃定園法印に御劔を存見一



秋乃葬之を以て秋の星七乃曜を並て  
此の星と云ふは天保十三年より五百六  
十五年前あり 或云白石先生軍器考に此劍の  
ありを言及せず不詳なり  
答云二天像乃持物なるを以て先生儼見落  
世寺僧より奉く示す故なる  
西古より銅劍あり一ありと下る臚列と

山海經注に汲郡家中得銅劍一枚長三尺五寸  
今所名干將劍明古者通以錫銅為兵器と云  
山海經注に晉郭璞が汲郡に冢を發して

銅劍を得たは王隱晋書に太康元年の

正日本應神天皇十一年にあり 天保十二年  
千五百六十三

年系 なり 太康年中の尺は日本曲尺の七寸八分九

釐七毫八絲 晋前尺 小南尺其三尺五寸八分

二尺六寸五分九釐二毫三絲あり

吳越春秋に越王允常聘歐冶子作名劍五枚一

曰純鉤云々薛燭善相劍矍然望之曰沈々如芙蓉

始生於湖觀其文如列星之行云々造此劍赤



葦之山破而出錫若耶之谿涸而出銅吉日良時  
區治子因天地之精造為此劍云々とあり越  
王の純鉤も錫銅みく造云々劍みく然も星の  
文ありし好り越王允常ハ史記考みあり越  
王勾踐の父みく吳王闔廬と戦く相怨伐と  
云ひ勾踐も周敬王の廿四年を元年とせしめ  
日本懿德天皇の十六年みあり  
天保十三年み  
二千三百三十  
八年み  
なり

同書み伍子胥過江解其劍與漁父曰此劍中有  
七星北斗其值と百金とあり正しく七星北斗  
を顯くとたりと周拖伍子胥は吳王夫差十一  
年み誅きり於周敬王廿六年乃と日本懿德、  
天皇廿六年みあり  
天保十二年み分二子  
之百廿七年みなり  
潜確類書み唐太宗有古劍七星隱顯隨於北斗  
恒在燈下試之使人視雲氣過斗劍上逐星漸隱  
頃刻不差とみ又唐李嶠寶劍篇み背上銘為



萬年字胸前點作七星文作しあるを考合とれ  
こは御劍隋唐の物ふしし千二百五十年前の  
物たふしと毫髪も疑ふし

紺紙金泥梵網經 七種寶物一

上宮法皇真蹟ふし外題し御手皮を貼しと  
云淵鑑類函し白傳集云設有入書貝葉上藏檀  
龕中非堅非久如蠟印空假使人刺血為墨剥膚  
為紙即滅スナ如筆畫水故吾謂石經功德契如來付

囑之心と云如く寫經し辛苦多くし墨ハ血  
の如く紙を膚を剥くし如くしと云意を以て御  
手の皮を剥して外題しとありしと云ふ  
るし

此御經推古天皇廿二年上宮法王四十三歳の  
御時書寫志し人処と云ハ天保十三年しり子  
二百廿九年し及し一糸十七字紙長八寸九分  
首題皮一寸九分幅三分八釐弘安元年閏十月



定圖法印拜見

寫之乃...乃清之網...我救之  
同...  
同...  
同...

衲袈裟

七種寶物二

釋迦如來より勝鬘夫人へ授與乃袈裟ありと

云勝鬘夫人の法華上宮疏

上宮法王御撰  
唐沙門吉釋藏の

法華義疏と  
ハ自別あり 不夫勝鬘者本是不思議也何知如

來分身或是法雲大士但遠照踰闍之機宜以女

日月頁ナカ...

...

...

...

...

...

...

質為化所以初則生於舍衛國王盡孝養之道中

則為阿踰闍友稱夫人顯三從之禮終則影響釋

迦共弘摩迦衍之道と也世以七寶嚴其肉身而

今以萬行嚴其法身故云勝鬘と註に於翻譯名

義集不乃摩利或云末利此云鬘匿王之后西域

記譯為柰因施柰得報也女名勝鬘為踰闍王妃

とあり釋尊入滅周穆王卅六年壬申より太子

勝鬘師子吼一乘大方便方廣經を講とらば



了當り人ち寸ち分の後何の銘文を

奉 施入曰井到下今

熊野大鐘事

正應五年 辰卯月八日

右志者為松井田庄結衆

十二人現當志地成就也

と何り武田撥公とのけ國より打入給ひしころは後代に  
陣後より用ひしころは松井田庄のりきりしころは  
しころは沈たりしを引あげてしころは後代に  
しころは熊野社のよりしころは後代に

奉施入 石塔

當社権現石塔一基

右造立志趣者為

現當二世乃至法

衆平等利益也

文和三年 甲卯月廿八日

沙弥妙口敬口

と何り文和三年の後村上天皇の正平九年にあは  
年頃より世國より上松長部と埔の南職より新田の  
の知りし流人等のあはしをたへしける塔塔の







羅國物シ々々。膝鬘經講讚の時不用ハ後ハ知ト  
之へ了ト々々皆冠ト置ク旋ニ致シ欵

け。ふ。う。り。い。ち。く。ひ。ま。る。く。ま。の。世。と。形。々。の。ち。乃

世。乃。ろ。ひ。ま。へ。と。此。乃。け。ふ。ん。ひ。ま。る。く。翻譯名義集

小捷陀羅此云黃と小乾陀羅耶此云と小健駄

邏西域記云舊曰乾陀衛かと乃ハ在リ寶樓閣經ト

表下以レ乾陀囉樹香和白芥子油伏一切龍とあふ

ちと皆黄色をソ入ルと々

衲袈裟御画

面子翔鶴銜松枝つちを蔭繪ふ北背子蓮葉

山の圖を蔭繪ふ以寛政四年紫栗山邦彦屋代

輪池弘賢審定一く小野妹子隋朝より將來の

物と々々と輪池古れを摹刻と々々と世人周

ねくハ以テ圖を知レ々をゆりり今年余古れ北西園

院竟怒律師子質と々子即衲袈裟の画の背をり

小野妹子ハ推古天皇十五年七月隋子使して



十六年四月歸朝九十箇月子之於九年九月又

隋子使一十七年九月西朔日子九十二箇月子隋煬

帝大業三四五年天保十三年の同子なり二百三十六年二十

六年二十年子姉子父ハ春日皇子敏達天と小

野氏系因見姓氏録子小野朝臣者

彦媛津命五世孫米搗大使王命之後也大徳小

野臣妹子家於近江國滋賀郡小野村因以為氏

とあり敏達天皇の御孫ハ非るハ彦媛津

東鑑卷之八

命ハ孝昭天皇の皇子天足彦國押人命の孫ニ

と云ハ妹子を隋人ハ蘇因高と稱キハ云

ハ小野シヤウヤを蘇ソと聞訛シ妹子イモコを因高イコと訛リハ云

真鈴 七種寶物ニ

上宮法王降誕の日御殿の棟子出現キハ鈴也

と云今審ハ小ニ於テ軍荼利金剛夜叉南大聖不

動中降ニ世大威徳東五大明王西を鑄出ス但シ是

を鈴と云ハ訛リハ玉篇子鈴為圓形半裂以出



鞞銅珠於内以鳴之と云は此真鈴の如き  
ものりいりり以周禮地官封人の注る鏡如鈴  
無舌有柄執而鳴之以止擊鼓と云有柄執と云  
ふれば以真鈴と似ふものりや柄執を銛  
形をとりを鈴銛と真言家子いなり  
以鈴銛銛折損上宮法王降誕の日子出現と  
と云ハ敏達天皇二年癸巳の歲用明天皇いよ  
た皇太子みくろゆめ啓し時々天保十三年分

千二百七十年ふ及ふ

賢聖瓢

七種寶四

八尺瓢と云長五寸に徑三寸三分周一尺六  
寸六分底徑三寸重廿錢五分あり孔夫子榮啓  
期鬼谷先生蘇秦張儀四皓小楷書九人と樹木  
六本鳥四羽を凸キノタ起繪ふと定國法印拜見し  
かけと心ヤマフキキミ八尺りものまうはま夕顔長何乃  
ゆへをたしと詠了



又とひ笑の瓢と云ふ萬葉集宴款サモリノタ

睦月ムツキをひ春乃初ハルノハツメりハツメひひあひエヒ笑エヒくハツメ

時トキしハツメ免ヒツやヒツとヒツ所トコロ飲ノムるヒツ如ニくヒツ酒サケ宴ノ乃ヒツあヒツりヒツ

名付ナツケしヒツあヒツりヒツ

又賢聖瓢と名付し義を考へ飲ノムる酒護サケノりヒツ凡酒

以色清味重コト為シ聖色如金而醇苦者為賢とあり

け瓢清ハツメるヒツをヒツも醇ヒツ苦ヒツをヒツも容ヒツ愈ヒツけヒツたヒツ賢聖瓢と

いふヒツふヒツらんヒツ四皓ハ史記留侯世家了高帝欲易

太子及燕置酒太子侍四人從太子年皆八十有

餘前對各言名姓曰東園公角里先生綺里季夏

黃公上乃大驚云羽翼已成矣難動矣とありけ

惠帝の廢ヒツをヒツりヒツ給ヒツとヒツ休ヒツふヒツ所以乃置酒サカヒなりけ

喜と云愈ヒツし蘇秦傳ヒツ客有遠ヒツ為ヒツ吏而其妻私ヒツ於

人者其夫將來其私者憂ヒツ之妻曰勿憂吾已作藥

酒待之矣居三日其夫果至妻使妾舉藥酒進之

妾欲言酒之有藥而恐其逐ヒツ主母也欲勿言子則



恐殺其主父也於是乎佯僵而棄酒主父大怒笞  
之五十といふは怒みく亦戒とくく張儀  
傳小張儀嘗從楚相飲已而楚相止壁門下意張  
儀曰儀貧無行必是盜相君之壁共執張儀掠笞  
數百不服醜之云々儀已相秦為文檄告楚相曰  
始吾從若飲我不盜而壁若笞我若善守汝國我  
顧且盜而城とあふけ哀と云へく列子小榮啓  
期庶表帶索鼓琴而歌云々吾為人一樂也得為

男二樂也行年九十三樂也貧者士之常也死者  
人之終也孔子曰善乎能自寬者也とあふけ樂  
好り是みく酒ハ喜怒哀樂ふあく自ら寛みと  
あふくと云ふとを畫小顯く鬼谷先生を畫  
たふけ蘇秦張儀の學を受く根本なまは酒ハ  
又悲哀乃根本と云意あふあふ彼是を通く  
畫を考ふまは酒器たふくと更子論かきや

御足印

七種寶物五



上宮法王御足跡を褥上り印し給ひしこと云  
千二百餘年の後了至るゆゑ隠々として褥上  
り現存と云ふと権者乃靈妙不測の至る

梓御了

七種寶物六

此御了新井筑別の軍器考ふは法隆寺ありと云  
梓了也と云ふれと是等ハ神代了同くは波志  
了の遺制と覺えし也とあり今審ふと云ふ長

六尺強 辛辨換 失あり 本埋ハ近き頃依濃國葦科山等

より出給梓と銀似し大和國大安寺八幡宮  
了傳と云ふ邦功皇后の所了山城國靜原二文  
山より現存と云ふ天武天皇の所了と長經の  
異と云ふ所と云ふ所謂丸木了好

六目鏡

七種寶物七

物部守屋大連を射給ふ義なりと云ふ實子  
大連を射たふ義ありし跡見赤檮了具足  
ありと云ふ河内國淡川郡太子堂村了守屋塚鏡



箭塚ありふりて後ハ之痛兼今ハ傳ふ於處ニ理  
かきよや因云鳴鏑ハ莊子在宥篇の馬知曾史  
之不為樂器之嚆矢也と云注ハ嚆矢ハ矢之猛  
者トあ後ハ今の鳴鏑トヤリ  
軍器考ハ  
鳴鏑の始ト  
記キト疑ハ一ハ詞林海錯ハ嚆矢先聲郷音箭ト  
カキハ定ム鳴鏑ナリトハありハ定ム奴義  
然ラハ周顯王の頃トヤ世子行ク後トモノト  
志ムカキハ天保十三年より二千百六十餘年

前のことありて皇朝孝安天皇の御宇ニある天  
孫八日鳴鏑を五持後ハ一ト云ハハ兼ハ皇朝  
みく造れるト外トツクニ外ハ先々トヤ東大寺正  
倉院ニ現存トカ聖武天皇の御鳴鏑矢二筋目  
カハツト六ツトナリ四天王寺トカカ鳴鏑矢  
ト上宮法王乃御前カカカカカカカカカカカカ  
六ツあり

又云守屋大連ハ欽明敏達用明之朝乃大連ト



大連ハ大長ヲ以テ職アリ今ノ將  
軍ト云フ物部ヲ帥ヒテ武備ノ任ナリ  
ト云家河内國滋川郡阿都今跡部 揚津國難波  
今天王寺ノ地 有リ其所領田園河内郡揚津今 十八  
万六千八百九十代ありト云一代ト云今ノ  
五歩小部是月十八万六千八百九十代ハ今ノ  
九十三万四千六百八拾歩好リ之歩一所ト  
志々ニ百拾歩所ハ辰歩百八十歩ニ是辰ノ租今  
七斗八升ト積リ凡二子ニ百ニ拾六不斗ハ

升ハ合七勺又撮許を収む處守屋ノ禄ハ四  
物成五千八百  
四十俵許 其家ヲ滅シ身ヲ殺シ根ヲ断シ  
是等ノ用羽天皇即位ノ時 免蘇我馬子宿禰  
大臣物部ヲ削守屋連大連 先綱ノ如ク仕ナリ  
たり 志々天皇ニ寶子 歸依キんと云フ 是ト云テ詔  
あり 一時子守屋連ト云フ 國祚ヲ長クシ 他  
邦ヲ敬ム 國々ノヤトシテ 隨ヒ奉リ 以馬子宿  
禰ヲ詔ノ事ニ 隨ヒ奉リ 是ト云フ 大長



大連中あゝく好りしふと守屋を河内国阿  
都波守に退きし之をたゞ天皇は四月九日崩  
御よりけり間守屋連ハ元徳部皇子を即位し  
けりまらんと計り馬子宿禰は崇峻天皇を御  
信よりけりまらんとて元徳部皇子を誅し  
七月馬子宿禰は皇子をたゞく免まらんとて遂に守  
屋連を河内國浪川郡衣摺キスリの家より殺したる  
事あり用明天皇を磐余池イハカミ上陵し葬りたり

八月二日崇峻天皇即位し即ち御入を遣はし守  
屋連を之寶子歸依しなむとて起し詔し違  
ひし罪を治せしむとて其姦を滅し其を教し  
馬子宿禰の獨權を專めしむとの意あり出  
しと詔しされはあかち上宮法王の怨敵  
とも云ひく事あり也

象笏

推古天皇即位元年癸丑歲四月十日己卯厩戸



豊聰耳皇子を皇太子と云ふは仍く録抄改心万撮  
悉委焉と日本書紀に云ふは乃時より  
云ふ所筈なりといふなり今御筈の長ふより  
考ふに隋萬寶常の定むる水尺みく造れる  
御筈あり其故いふなりと云ふ隋書禮儀志に筈  
長尺二寸方而不折とあるに筈の長さは尺二  
寸を定めると云ふに關に萬寶常水尺を晋承尺の  
一尺一寸八分六釐とある尺を造れば今申尺は

八寸九分餘とあるは尺の一尺二寸と曲尺の  
一尺〇七分に籠許ふとあるは所筈の長と筈を  
今を造るに如し萬寶常の水尺を造るに隋  
の開皇十年を造れば皇綱の崇  
峻天皇三年とある皇太子抄改とある所あり  
より四年の所あり水尺を止むる太業元  
年とあるは推古天皇  
十三年の所あり隋朝より傳へるに疑ふ  
能らば天保十二年より十式百六十年家の物  
か  
又云筈の長は今申尺二寸を相いらぬと



いふとも尺より異あるを以て長短いふからん  
 河内國道明寺に傳ふるは菅丞相の牙笏は曲  
 尺にして一尺一寸八分あり即天平尺の一尺二  
 寸あり 天平尺は曲尺の九寸  
八分を以て一尺と云 又或家藏の牙笏  
 は曲尺の一尺又寸よりある是は鯨尺みく一尺  
 二寸を以ていふ 鯨尺の一尺二寸を  
曲尺の一尺又寸と云 真楠木の  
 笏一尺四寸八分 鯨尺の微  
弱あるを 忠仁公貞伝公笏は  
 一尺四寸五分 呉服尺みく造れるを  
呉服尺の  
一尺二寸は曲尺の一尺四寸は

蜻蛉珠金剛子御呪珠

分は以外毫釐の異同ありとも怪しむ所を  
 子阿々云  
 源氏物語表紙卷に聖徳太子乃百福より得ん  
 玉けふ金剛子の珠數の玉乃裝束したるやう  
 て玉圍よりいふは信實の切らぬは信を有  
 けは表式にありは信實の傳よりしと云ふは  
 蜻蛉珠を本草寶石の集解にいとけふ猫睛石



のこりなりと云大明一統志に三佛齊國に猫  
睛石細蘭國出瑩潔明透如猫眼睛とあるは西  
蕃遠夷の産物と志に於て留青日札に嚴嵩抄  
没家産猫睛二十顆内黒猫睛一顆と云ふは  
ハ南時の人得報と云ふのと云ふに金剛  
子の文獻通考波斯國の條に金銀鍮石金剛火  
齊銅錫と云ふは波斯國にハ産すと云ふのと云  
ふなり又同書小宋文帝元嘉五年天竺伽毘黎

國王月愛遣使奉表獻金剛指環とあるは同

のふに云ふなり

御塵尾

上宮法王橋寺あり藤鬘曼經を講し終る時子執  
之を給ひ御塵尾なりと云ふなり橋寺は高市郡  
橋村にありと云ふなり佛頂の上宮院  
菩提寺といふ日本書紀に推古天皇十四年  
七月天皇請皇太子令講藤鬘曼經三日説竟之と



あまの皇子太子二十四歳の御時あり推古天皇  
冬用明天皇乃同母妹より御をば皇太子乃  
御伯母君なりけ時御氣は十よりあり勢は入太  
子傳ふ講竟之夜蓮花零花長二三尺而溢方三  
四丈之地即於其地誓立寺堂是今之橘樹寺也

日本記  
通證 云云

麈尾を東大寺正倉院寶物圖より見ゆこれ尺  
總長二尺 柄長七寸五分 毛長四寸あり聖武天皇  
白檀を相ふ

皇の御物とれけ上宮法王乃御物あり晋書小  
王衍每捉玉柄麈尾と云淵鑑類函より犀柄麈尾  
も見ゆさく白麈尾黒麈尾と云るの由りけ  
毛も黒白の別ちあるを云ふさく名苑に麈  
似鹿而大其尾辟塵羣鹿隨塵皆視其尾為準故  
古之談者揮焉とあり

天平寶字五年 天保十三年より  
一千八百二十二年系 小書たふ法隆  
寺東院佛經寶財條より合獸尾二枚壹枚漆塗並



吳竹形端銀繼并攢一合表漆塗裏丹塗右上官  
聖德法王御持物とあるはけ御塵尾あるは  
たゞ一攢と散逸とと見え今見ふと  
今一枚乃塵尾と赤色あり以象牙為銀枝金塗  
為雜漆牙為莖雜玉口枝莖并片合攢在白綾襪  
とあり今存とある否を知らず

繡佛

間人<sup>ハシヒト</sup>皇后ありい<sup>カシハテノ</sup>膳大媛の繡五人物と云ふ

今考ふるに日本書紀推古天皇十三年の條に  
四月辛酉朔天皇詔皇太子大臣及諸王諸臣共  
同發誓願以始造銅繡丈六佛像各一軀乃命鞍  
作鳥為造佛之工云々十四年四月壬辰<sup>日</sup>造竟  
とありは繡像もは時同しく造らばしものか  
るは間人皇后と云ふ欽明天皇の皇女あり  
泥部<sup>ハヒツカ</sup>穴穗<sup>アノ</sup>部皇女と云ふは御母を小姉<sup>コアノ</sup>君と云  
蘇我<sup>スヘ</sup>稻目<sup>イナメ</sup>宿禰<sup>スネ</sup>女あり用明天皇の后ふたると



給ひく厩戸皇子 即上宮 法王 末日皇子 殖粟皇子 次

田皇子 乃御母后 中御母 推古天皇廿九年

辛巳十二月廿二日 癸酉 小かくれ給へる

天壽國の曼荼羅銘文 カシノテ 藤大妃之藤

部傾子良の女 ホトケ 名を善岐 イソツツ 義郎女也

推古天皇六年三月 皇太子の妃とあり 三十年

二月廿一日 癸酉 ハルノ 中令堂釋迦尊の

光後の銘 ハルノ 中令堂 ハルノ 中令堂

塗金釋迦如來 白銅出山釋迦 今三尊

塗金彌陀如來 觀世音三像 二臂如意輪

凡四十八體の佛像 高麗國大興王より 貢せ給

黄金を以て 鳥佛師より 賜給ひ 多といふ

鞍化鳥ハ 鞍部村主司馬達 日本紀通證 南梁

十六年 末朝といひ 河内國淡 司馬達等 继体天皇

川郡 鞍作村に 居といふ の子 多須那の子

なり 推古天皇の十二年 小造佛工とかき 賜給

なり 日本書紀より 是時 高麗の大興



王皇綱あく丈六乃銅繡二像を他ら新く王を  
開く黄金三百兩を貢るより由書紀子及たり  
き西に式拾口鉄ふりり凡今祥う子七分八釐  
許より南に片之百兩を貢るを貫百口拾口子許ふ南  
るたより元興寺丈六佛像の光銘子推古天皇  
十二年歲次乙丑以銅二萬二千斤金七百五十  
九兩敬造釋迦丈六像銅繡二軀并接待等と云  
述は皇綱あく令口百八十九兩を加えら終ると

志ら於銅二萬二千斤及今の口子百口拾貫目  
子南り令七百八十九兩及今の口貫八百口十六  
分五分又釐許より南に片分量あく考ふる子凡  
銅を貫より金六分八釐七毫六絲を用ゆる割  
たり

一光三尊光後銘子甲寅年二月廿六日弟子王  
延孫奉為現存父母敬造金銅釋迦像一軀願父  
母乘此功德現身安穩生生世世不經三塗遠離



八難速生淨土見佛聞法の五十九字を七行に刻とたくし釋迦像を今かゝ後光のまかり甲

寅を推古天皇二年小南王延孫が何人と云

天保十三年と一千二百四十九年

如意輪觀音像座縁了歳次丙寅年正月生十八

日記高屋大夫為分韓婦夫人名阿麻古願南先

頂礼作奏也の卅四字を刻と丙寅を推古天皇

十四年好り天保十三年より一月生とい哉

千二百三十六年

生明の生と同しく月乃三日を云物多時を十

八日を今乃廿日あり高屋大夫と凡河内神別

神魂命十世孫伊已止足尼大連之後と姓氏録

了見え、新氏族か多也

釋迦佛光背小戊子年十二月十六日朝風父將

其零濟師慧燈為嗽加大長誓願敬造釋迦佛像

以此願力七世四恩六道四生俱成正覺の四十

九字を四行に鑄と戊子を推古天皇卅六年



天保十二年より一  
千二百十六年前  
を云ふ所の馬子推古天皇卅四年六月廿日丁  
未薨より日本書紀に見ゆ是等の銘文より依  
る考ふ所は凡に十八躰一時より他より一ふ所ある  
所より凡に四十八體と限る事と云ふ所ある  
事と云ふ事

御靴<sup>ユキ</sup>

新井筑列乃軍器考云法隆寺の靴と桐の木を

以て作り織物の類を黏きしり剥落せしむる  
凡そ此類を竹の葉に似せしむる葉の形  
の如くあるものや敷きしり残りしり  
と云ふ是御靴<sup>ユキ</sup>と云ふ所日本書紀推古天皇十  
一年十一月皇太子請於天皇以作大楯及靴<sup>ユキ</sup>と  
ある所の如くへけし月天保十二年より一  
千二百十年系の物と云へし

塗金長幡



橘寺あり、勝鬘經を傳へ給へ時、掛給ふと云  
推古天皇十四年の物なり、あまを大灌頂幡と  
云推古天皇三十一年の紀に七月新羅遣大使  
奈未智洗爾任那遣達率奈未智並來朝仍貢佛  
像一具及金塔并舍利且大灌頂幡一具小幡十  
二条とあり是あり其後養老六年十一月丙戌  
の紀に灌頂幡八首道場幡一千首とありへた  
ふられあり翻譯名義集刹摩之注に云此云竿

即幡柱也法華云表刹甚高廣此由塔婆高顯大  
為金地標表故以聚相長表金刹如法苑云阿育  
王取金華金幡懸諸刹上塔寺依昂と云金華金  
幡の類か多へ  
西大寺資財帳に小幡六流各  
長四尺七寸以金銅裁物并雜  
玉飾とあり由入りありは金幡ハ廿四尺許あり  
此の類因や相違いと云人ありと云とあり

琥珀御呪數

皇太子前生あり御所持のふ小野妹子臣の將  
來と云所と云前生の事を記得たりと獨異記



了晋羊祜り前生みく玩弄きし金銀を採り了  
たりしと洞冥記り胡沙門中書令王珉り子小  
生を成りし外國の語を解しいさく見せし國  
固乃珠貝の名を知らずかたと上宮法王の前生  
の法具を求給ひしと全く相似しり琥珀を博  
物志り松脂淪入地中千年化為茯苓又千年化  
為琥珀一名江珠といひ元中記不月楓脂淪入  
地中千秋為琥珀といふり松楓の異いさく孰

きり是かたをりしと拾遺記り漢武帝寶鼎元  
年西方貢珍怪有琥珀燕置之静室自於室内飛  
翔とあり漢代より世にありしものと同  
北漢書西域傳り罽賓國出珠璣珊瑚琥珀と  
あり其種類り靈魄梅花琥珀水銀琥珀鑿苒り  
ありありありし御呪珠を鑿しり入るあり本  
草琥珀千年者為鑿状似玄玉黒如純漆とあり

御水瓶



上宮法王の前生後生の際隨身ありし法具也  
と云ふ梵網戒經に菩薩行頭陀時及遊方時行  
來百里千里此十八種物常隨其身と云十八種  
物の第十三を瓶と云寄歸傳に梵云軍持此云  
瓶常貯水隨身淨手といふ云云と云用ははくきり

御鉢

一ハ高麗僧惠慈より傳ふ鉄鉢一ハ五綴  
鐵鉢隋朝より小野妹子臣の將來より一ハ

達摩大師より念禪法師へ附屬ありし一ハ妹子  
臣將來より形り高麗惠慈より日本書紀推古天  
皇元年皇太子習内教於高麗僧惠慈とあり是  
あり達摩大師より梁中大通元年に遷化ありて  
皇朝継体天皇二十三年より天保十三年より  
千二百十四年迄  
廣輿記に無言和尚嘗持鐵鉢入定欲晴則鉢  
内火光燭天遂霽欲雨則鉢中白氣上升遂雨と  
云云たり一ハ梵網戒經十八種物の第二に鉢と



あり妙臂經上卷の四種の鉢を明らるるより本  
鐵瓦匏とれなり十八物鉢小僧祇鉢他羅者受  
四升也とありけ鉢乃容受も亦四升なりと  
四分律の應薰他黑色赤色と云僧祇律の薰鉢  
他孔雀咽色鴿色如法と云善見律の鐵鉢五薰  
已用土鉢二薰已用といふ

錫五綴と云あると解と云へうは東院佛經并資財  
條の鐵鉢前口後綴右上官聖德法王御持物

天平九歲次丁丑二月廿日律師法師行信推覓  
奉納賜者とあり今案の綴は廣韻の針也と見  
ゆ後綴とは後小針とて修補と云意小や  
あらんか定圓法印拜見

いふものまはりて茶の世といふを  
も物や赤色と詠とて終は五綴と云とも  
既る五百六十五年系所見ありけ鉢圓徑七寸  
四分高四寸六分積凡百十九寸六分七釐有奇



小南於今系升みくき升八合五勺餘を受<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>し  
あまを四分と終<sub>レ</sub>は四合六勺ニ撮五抄許を<sub>レ</sub>ん  
て鐵鉢の一升と<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>釣升と<sub>レ</sub>全<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>る時<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>鐵鉢  
大寶制令の<sub>レ</sub>穀升<sub>シラケコメス</sub>四升を<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>く度と<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>上宮法王  
の御時の量<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>升<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>く此量と<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>か  
以<sub>レ</sub>行信法師上宮法王御物と傳聞を誤<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>か

錫杖

上宮法王前生みく<sub>レ</sub>持<sub>モク</sub>と<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>南北六

朝の物な<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>魚<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>梵網戒經十八物の第三錫杖  
と<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>梵<sub>ハ</sub>曰<sub>ハ</sub>隙棄羅<sub>ト</sub>為<sub>レ</sub>堅牢故用<sub>レ</sub>銅若<sub>レ</sub>鐵作<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>蓋  
其所受用之緣非<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>乞食受<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>本律<sub>菩薩五</sub>  
為<sub>ハシオトコシ</sub>驚<sub>ハ</sub>與<sub>ハ</sub>持<sub>ハ</sub>出<sub>ハ</sub>助<sub>ハ</sub>律<sub>誦</sub>十<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>勞病用<sub>ハ</sub>出<sub>ハ</sub>毘奈耶<sub>と</sub>十八  
物圖鈔<sub>よ</sub>ん<sub>く</sub>た<sub>り</sub>法顯記<sub>る</sub>那<sub>レ</sub>端<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>佛<sub>レ</sub>寺  
寺中有<sub>レ</sub>錫杖長<sub>レ</sub>六<sub>レ</sub>七<sub>レ</sub>尺許<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>筒盛<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>舉<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>  
能<sub>レ</sub>移<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>異常<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>魚<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>梁簡<sub>ハ</sub>父  
帝の錫杖銘<sub>る</sub>ハ<sub>レ</sub>妙<sub>レ</sub>節<sub>レ</sub>嘉<sub>レ</sub>光<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>聖<sub>レ</sub>振<sub>レ</sub>灼<sub>レ</sub>排<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>霧<sub>レ</sub>轉



騰雲鳳躍永異玉神長踰金錯とあり

又考ふあり錫杖の中より五輪塔形を能く見  
談藪に謝尚夢其父告之曰西南有氣至衝人必  
死建塔寺可禳未暇三寺可杖頭刻作塔形氣來  
指之尚如其言置杖左右果有黑氣衝尚家尚以  
杖指之氣即回散闔門獲全氣所徑處數里無復  
子遺及少者道らるるを云々云々云々あり云々  
か形尋ねぬ

東院資財條より古様錫杖一枚右上宮聖徳法王  
御持物矣大僧都行信師推覓奉納新様錫杖一  
枚奉納法隆寺僧延豊と見ゆ今見る處はゆり  
古様錫杖あり一翻譯名義集より義浄云二股  
六環是迦葉佛製若四股十二環是釋迦佛製と

あり

柄香爐

用明天皇御腦平愈御祈念乃た先上宮法王用



いさむらひのつと法隆寺供養の日皇太子  
用ひ為人とのと岡本宮みく法華經講讚の日  
用ひ為人とのと皇太子御腦の時ヤシロオホエ  
皇子御祈禱に用ひらるゝと教令に種あり但  
用明天皇御腦祈念の時と代日本書紀了二  
年四月丙午二日新嘗于磐余河上是日天皇得病還  
入於宮羣臣侍焉癸丑天皇崩于大殿とある時  
の事ふふゆる即上宮法王十五の御時たり又

推古天皇十四年皇太子亦講法華經於岡本宮  
天皇太喜之播磨國水田百町施於皇太子因以  
納于斑鳩寺とあり法華經講讚ハ推古天皇  
十四年の事あり是歲イカルカ斑鳩寺に納むとあり  
法隆寺供養の事と十四年の事ふゆる斑鳩寺  
云は法隆寺東山背大兄王を聖德太子の御子  
院のあとあり母々蘇我馬子大臣女を中平氏太子傳不見  
えたり



東院資財條云鑰石香爐一具花形錦座具云  
奉納講法華經料大僧都行信とあるは以四種  
乃内小や鑰石ハ玉篇云似金と云格古要論云  
自然銅之精也今爐甘石煉成者假鑰也崔昉曰  
銅一斤爐甘石一斤煉之成鑰石真鑰生波斯國  
者如黃金燒之赤色不黑と云一統志云峇兒密  
古之丹眉流國產鑰石と云小く知魚一又大永  
四年甲卯月廿二日大和國漆下郡池内興弘法

隆寺聖靈會香呂口梵音衆左方沙汰人懷曉猛  
海の四十一字を鑄きしとあり

針筒

上宮法王前生みくく之衣制衣縫の針筒ありと云  
は南北朝の物ありく魏武帝上雜物疏中  
宮雜物象牙管鍼筒一枚とあるは物と全く  
同一けしはくは漢魏の間乃物たりや亦  
へくは禮内則子右佩箴管線續施般衰と云



をひく考の後は<sup>カウツ</sup>歳管とてふ三代より一々有  
去形り御多子正宮法王御物よりく内則の  
一品を親視と云ふをゆゑり<sup>ウ</sup>豈愉快ありや

經宮

一ハ用明天皇宸翰法華經八卷を盛る如ハ  
小野妹子將來と云ふ如ハ<sup>ウ</sup>同く法華經を  
盛たり用明天皇天保十三年と千二百五十  
六年初る崩御小野妹子將來の年ハ初り云

經筒

赤旃檀乃枝ありと云本草綱目ハ紫檀白檀總  
謂之旃檀といハ大明一統志瓜哇國土産檀香  
樹與葉似荔枝といハ貝原損軒ハ釋氏乃赤旃  
檀と云るハ旃檀亦分<sup>ウ</sup>一といふるハ材ハ案  
檀と云見<sup>ウ</sup>ハ晋書ハ陸機以竹筒盛書信繫黃  
耳犬頭送至其家と云々一時の意巧あり  
錢起ハ裴侍郎ハ贈る青竹筒詩ハ楚竹青玉潤



從來湘水陰緘書取直節君子知虛心<sub>ニ</sub>云々<sub>ト</sub>有  
む正しく書筒と開拓古樂府小尺素如殘雪結  
成雙鯉魚要知心裏事者取腹中書と云由書信  
の長一尺ありし説と寸魚し今以徑筒曲尺の  
九寸八分ありあは即唐丈尺天平尺と符同と以  
書筒をくく尺唐代乃物小や

東院資財條了徑橫壹合淺香長一尺一分九廻  
六寸六分とあり廻を云は必是圓橫ニルキヒツふ多へく

依く考ふふ子此徑筒の法量全く同く今尺の  
九寸八分を一尺一分より色は今尺九寸七分  
七一尺と以信亮嘗く御重尺考を著し即今尺  
九寸七分を以く一尺と以け徑筒  
と符け九寸七分尺乃六寸六分今尺の六寸  
四分あり周六寸四分を置く徑を求むは二寸  
強小あふけ徑筒徑二寸強と合同と奇と云へ  
き如り資財條又云右為敬重ト上宮聖德法王御  
持物法華經天平九年歲次丁丑二月廿日藤原



氏皇后宮奉納賜者と云々然る時は光明皇后  
乃造ら啓給入處と聞按天保十三年より一千  
百六年前ふ南るを然らば妹子臣將來と云  
ハ傳聞乃誤か定圓法印存見し  
玉くしけ二川も三川もかき浄法一川心入  
く及給うかとも先ふ是ありと云

經机

表ハ沉水香斑竹乃縁象牙乃足妹子臣將來乃

物と云は隋代の工手より出物あり珍奇と云  
さ致趣けんやたくしけを經机とり入は如何  
あし書案といふくく迫う致趣き元魏武帝  
上雜物疏に御物有純銀鏤帶漆畫書案一枚と  
云物乃類よやあし

東院資財條に經櫃座二具一班竹床子象牙為  
足在蟻結褥右天平十四年歲次壬午二月十六  
日正三位攝夫人宅奉納賜者と見ゆ致は經



机ふやゆらし然らば徑横座と云ゆきゆり橘  
夫人とけ續日本紀天平五年正月庚戌内命  
婦正三位縣犬養橘宿称三千代薨遣後四位下  
高安王等監護表事賜表儀准散一位命婦皇后  
之母也十二月辛酉遣一品舍人親王等就縣犬  
養橘宿称第宜詔贈從一位別勅莫收食封資  
人しあり即淡海公不比の室家小く光明皇后  
の母なり

油注

善住院覺賢僧都記小油注推古天皇宮中而太  
子所用とあり推古天皇と豊浦宮小く天皇位  
小即ち後ひ十二年十月小墾田宮遷らる後  
ひけ宮ふく崩沛す一海一と地圖を勘ふる  
高市郡豊浦の南橘稻淵とひく橘の地即  
小墾田宮の舊地ありと云日本紀通證ふる豊  
浦村の内とひ玉林抄小く小墾田與小治田同







伎樂面

日本書紀推古天皇廿年百濟人味摩之歸化曰  
學于吳得伎樂儻則安置櫻井而集少年令習伎  
樂儻於是真野首弟子新漢齊文二人習之傳其  
儻とあり味摩之り將來の面ありて天保十三  
年乙酉二百三十九年ふかきり西蕃ハ隋大業  
二年ふなる吳々元梁陳の舊地ありてはそは樂  
もよく陳後主張麗華君長酣歌唱か乃遺風か

るゆゝ大寶職負令雅樂寮頭の系子伎樂謂吳  
樂其腰鼓亦為吳樂之器とありては文武天皇の  
頃と雅樂頭の所管とありしとありて天平寶  
字又年八月乃紀るを奏吳樂とありて朝廷ふ奉  
らばしと知ゆゝ日本後紀大同四年の系子ハ  
伎樂師二人り定めり於續日本後紀天長十年  
四月左衛門左兵衛二府より吳樂を獻とと云  
は伎樂人なりともは伎をありて證ととへり



延喜雅楽寮式より、四月八日七月十八日齊會子  
伎楽人を東西二寺に分ち充るるよしと記さる  
た、その樂戸大和國城下郡杜屋村あり  
と云杜屋村ハ今國齒ノ載之ハ十市郡櫻井所  
の坤長門里邊高岡より去并去と云如所の是  
味摩之、伎楽を教ふる如ふ如へ、樂家録子  
南都楽人指氏ノ傳りり興福寺金堂下於  
四月八日申刻に由を奉ると云、い、西大寺

資財流記帳より依り考ふ是は治道ニ面 一面黒色一面

赤と云り今本寺藏中子鬼子非と非と云

男女とあり、黒朱の面あり、所謂治道なる

面、又獅子二頭師子兒四面と云り、本寺藏中

子見ると云、具公二面 一面桐白在、赤紫綾山

雲形縁一面、壘在、黒紫山 形押、金銅裁物鳳形縁

あつかいと云、東大寺八幡宮藏の伎楽面

子白面男子ハ取押合ありと云、面男子ハ取押



令子朱草を画きたるあり是吳公外郎也又

金剛二面 面相在銅字受一面 本寺花中子山石

鉢盤二口 在銅字受 本寺花中子山石

並在金 本寺花中子山石 崑崙二面 一面面相在

銅字受 本寺花中子山石 崑崙二面 一面面相在

金銅 本寺花中子山石 崑崙二面 一面面相在

本寺花中子山石 崑崙二面 一面面相在

薄 本寺花中子山石 崑崙二面 一面面相在

花中子山石 崑崙二面 一面面相在

押鋪一面 壘在青皮毛押金 本寺花中子山石

頭裁物廻字受三頂押鋪 本寺花中子山石

太狐二面 一面面相一面壘並頂 本寺花中子山石

狐兒四面 同上黒 本寺花中子山石

桐虎皮廻赤紫綾冠以金墨繪鳳并草形 本寺花中子山石

等錦縁一面壘青皮廻黒紫綾冠綺縁 本寺花中子山石

少々存と比十六面を横三合了納むと何の本

御沓

御像前不置処の御沓多し隋書禮儀志より



ハカ鳥皮履ハ形ハ唐六典ニハ凡百官弁服  
鳥皮履ト云ハ隋唐ノ際ノ物ナリト疑ハテ容  
ト

御磬

勝鬘經講讚ノ日用ニ於テ御磬アリ元々橋  
寺ニ有リ形ト云推古天皇十四年乃物アリ  
上宮法王三十日歳ノ御時形ノ文獻通考ハ銅  
磬梁朝樂器也蓋今方響之類也ト云又釋氏所

用銅鉢亦謂之磬蓋妄名之耳齊梁間文士擊銅  
鉢賦詩亦梵磬之類也ト云然ト云ハハ磬ハ  
齊梁乃際ノ器ナリト云夫天子降誕ノ百年  
許ニ前乃物ナヤアリ  
齊高帝建元年ハ日本  
雄略天皇廿三年ハ南  
ノ皇太子降誕ノ  
九十五年系ナリ

竹裘

梁昭明太子詠書帙詩ハ擢影兔園池抽莖淇水  
側幸雜細囊用聊因班女織ト云ハ淇水側トハ



詩不聽<sup>六</sup>彼淇澳<sup>六</sup>菉竹如簧<sup>六</sup>と云ふ依く形り細囊  
用と凡縹囊<sup>六</sup>緗素<sup>六</sup>と云く淺青色の縮布<sup>六</sup>と書  
を護る衣を他と凡竹を簧<sup>六</sup>と云く代括<sup>六</sup>を  
云班女織<sup>六</sup>と凡絲<sup>六</sup>と編<sup>六</sup>を云と凡昭明<sup>六</sup>  
子乃頃<sup>六</sup>より竹帙<sup>六</sup>あり<sup>六</sup>形り  
昭明太子の中  
大通三年四月  
堯日本の継體天皇廿八年乙皇太子  
誕生より乙十三年系ふあり  
牙籤世の法隆寺形と云乞<sup>六</sup>より西京雜記<sup>六</sup>不秘  
閣圖書皆表<sup>六</sup>以<sup>六</sup>牙籤覆<sup>六</sup>以<sup>六</sup>錦帕<sup>六</sup>又李泌積書經用

紅牙籤史用<sup>六</sup>綠牙籤子用<sup>六</sup>青牙籤集用<sup>六</sup>白牙籤と  
あり<sup>六</sup>牙籤ハ白け<sup>六</sup>凡集部<sup>六</sup>用<sup>六</sup>ゆ<sup>六</sup>ゆ<sup>六</sup>形り  
其大小長短隋唐<sup>六</sup>摸倣<sup>六</sup>き<sup>六</sup>か<sup>六</sup>形り  
一ハ建久年中右大将頼朝郷乃修補<sup>六</sup>き<sup>六</sup>り<sup>六</sup>  
と云凡建久六年東大寺供養の年<sup>六</sup>不<sup>六</sup>り<sup>六</sup>天保  
十三年より六丁に十八年<sup>六</sup>不<sup>六</sup>及<sup>六</sup>

廣東御褥 蜀江御褥 蜀江裂  
上宮法王廻鳩宮<sup>六</sup>御用あり<sup>六</sup>褥あり<sup>六</sup>是を



天寺資財法元帳  
丁要問帳能裏錦縁  
石組  
織竹粉帳御言  
拾組赤珠縁

詩不瞻<sup>六</sup>彼淇澳<sup>六</sup>菉竹如簧<sup>六</sup>と云ふ依く如く細囊  
用と尺縹囊<sup>六</sup>緗素<sup>六</sup>と云く淺青色の縮布<sup>六</sup>如く書  
を護る衣を他と尺竹を簀<sup>六</sup>如く代<sup>六</sup>如くを  
云班女織と尺絲<sup>六</sup>如く編<sup>六</sup>云志<sup>六</sup>如く昭<sup>六</sup>明<sup>六</sup>と  
子乃頃<sup>六</sup>如く竹帙<sup>六</sup>如くあり<sup>六</sup>如く  
堯日本の継體天皇廿八年乙皇女  
子誕生より十三年乙未の  
牙籤世の法隆寺形と云乞<sup>六</sup>如く西京雜記<sup>六</sup>不秘  
閣圖書皆表<sup>六</sup>以<sup>六</sup>牙籤<sup>六</sup>覆<sup>六</sup>以<sup>六</sup>錦帕<sup>六</sup>又李泌積書經用

昭明太子の中  
大通三年四月

紅牙籤史用<sup>六</sup>綠牙籤子用<sup>六</sup>青牙籤集用<sup>六</sup>白牙籤と  
ありけ<sup>六</sup>牙籤ハ白け<sup>六</sup>尺集部<sup>六</sup>用<sup>六</sup>ゆ<sup>六</sup>如く如く  
其大小長短隋唐<sup>六</sup>摸倣<sup>六</sup>如く如く  
一ハ建久年中右大将頼朝郷乃修補<sup>六</sup>如く如く  
と云尺建久六年東大寺供養の年<sup>六</sup>如く如く天保  
十三年<sup>六</sup>如く如く六<sup>六</sup>如く如く十八年<sup>六</sup>如く如く及<sup>六</sup>如く  
廣東御褥 蜀江御褥 蜀江裂  
上宮法王廻鳩宮<sup>六</sup>如く御用<sup>六</sup>如く如く如く如く



世に法隆寺廣東と云廣東は廣輿記に廣州府  
 禹貢揚州之南境天文牛女分野春秋為南越地  
 とあり日本より海上八百七十里と云通商考  
 今も物産に錦金緞あり蜀江錦、魏文帝與群  
 臣論蜀錦書前後每得蜀錦殊不相比適可訝  
 而鮮卑尚復不愛也自吾所織如意虎頭連璧錦  
 亦有金薄蜀薄來至洛邑皆下惡是為下工之物  
 皆有虛名と云け此頃より蜀錦を賞せしと

知愈し山謙之丹陽記に歴代尚未有錦而成都  
 獨稱妙故三國時魏則市於蜀吳亦資西蜀至是  
 始乃有之と云延喜縫殿寮式に褥三條縮一足  
 四丈絲三朱綿五屯と尺四寸一糸五丈三  
 尺三寸の縮一朱絲六兩十六朱の綿を用也  
 魚神今食御褥ハ帛三丈暴布ニ丈一尺席一  
 枚を用ふとい有り絲綿の料々同くハ  
 魚鄴中記に石虎作褥長三丈用錦縁之と云け  
 錦縁褥東番のくくあり有しと明らる形り



石虎、東晋の咸和十年を以て自立して建武元年と云日本仁徳天皇乃二十三年よりあつた天保十三年より千五百八十年迄あり

夏御褥

因幡國能曾姫の皇太子へ獻了る物と云樂府雜録小康老子嘗買一錦褥有波斯見之者乃曰此氷蠶絲所織錦暑月陳於座滿堂清涼と有り夏の褥と云もの西蕃より所見あり

御織キタカサ

上宮法王御物と云大寶職負令了主殿寮頭掌供御輿輦蓋笠織扇とありと云皇太子官屬小を何より是を掌ると云をり及び隋書禮儀志皇太子鸞輅衣書車為副十二乘駕牛漢卓蓋朱裏とありは御織の如くありけり

推古天皇御几帳

東宮舊事小皇太子納妃有熟絳綾帳とあり月チリトカキヤは御帳の如きもの形か座したる此御帳



塗金の小鈴を以て飾ら終ると又此は凡淵鑑  
類函より相云の絳綾帳鑲黄金龍五色羽葆流蘇  
のりとりひ古詩小紅羅複斗帳四角垂香囊と  
いひ海録碎事小流蘇帳と云の類かぶる魚と  
廣東錦小幡 蜀錦小幡

岡本宮みく用ひ終ると云は推古天皇十四年  
の事あり唐曼經講讚ありしも法隆寺供養の  
昔より同年の事と小幡と云は日本紀推古天皇

三十一年の紀に新羅貢小幡十二條といふ物  
の類かぶる魚

青磁浮牡丹花瓶

上宮法王へ百濟國より獻せらる物と云牡丹は  
鶴林玉露より牡丹自唐以前未有聞至武后時樵  
夫採山乃得之とあり終り上宮法王乃時牡丹の  
畫象あふへく寸と云人の終り共酉陽雜俎に謝  
康樂集中云水陸竹間多牡丹とあり終り劉宋の



初より所見あり 日本元祿天皇の御宇にあり  
上宮法王より百五十年許り  
前か青磁むらじき 秘色と云源氏物語末摘花  
の巻より清いひくくやう乃唐の物なりと人  
よりよと何のくきくひもふくと云ふは形り

達摩大師袈裟

菩提達摩尊者ハ梁大通三年十二月遷化日本  
継體天皇廿二年ふ南宮上宮法王降誕より凡  
四十四年系ありたゞ一推古天皇廿一年十二

月庚午朔望を子片岡山より見送るに飢ふに  
世より達摩大師なりといふふや然りは比  
袈裟ハ其飢ふる物なり一物ありんてハ天保  
十二年と千二百廿年より及有り

紅牙尺

上宮法王御物と云と小今其製物より物より考ふ  
るより二階厨子より置物より重硯箱より入る尺なり  
類聚雜要抄小尺長一尺弘九分半厚二分牙又



紫檀用之五寸如是打目五寸牙畫ヲカキ紫檀  
ニ繪ヲ畫キ摺螺鈿ツといひ尺袋長一尺二寸厚  
四分半弘二寸一分紫檀地といひ尺全貯を  
為緋ケヒキと染く四邊ケヒキ系解ケヒキをふく半分を五川ケヒキ  
より一知五寸と云へる也と云ふ系ケヒキかけ  
は真尺ケヒキといふあり尺いんや寸系ケヒキのありや  
ハ三分五釐許も短うケヒキを陸奥國耶麻郡惠  
日大寺ケヒキの瑠璃尺と云阿角あり物り藍ケヒキとて

深て面子花鳥や鳥を、例子香草を繪のけふと  
半尺手五寸を分ち半尺ケヒキ寸を刻とありふると  
と云ふは尺と同くたういさう長きケヒキのこ  
を画きたふ尺 是は相馬将門乃女如菟尼ケヒキ  
遺物ありと云ふ或は白氏文集の中和日謝恩  
賜尺杖ケヒキといふ紅牙銀寸尺ケヒキ以紅牙為  
尺白銀為寸羨而有度と云物なりんと云と云  
は尺ケヒキ銀寸ケヒキ一伝ケヒキといふや



釣升

縁フ小雙鉤フ重大廿六斤受一石四斗とあり

底乃破キたカふマ子紙ハをア〜米ヲを容ム〜子ノ系

升六斗四升九合許を受ク 寛政四年十二月源

年中將谷屋ニ 所校ニカ同 あき〜キ衣ハ斗トとシ持ハキ升

今乃四合六勺ニ撮入抄七忽不有ル即大寶令

のシラ穀升ナリ 大寶令の穀升積卅寺あり然一

て何のナり一石四斗ヲ受ル大錡を他らシ

天平七年十月丁亥  
詔勅と亮云々  
借ら以傍之人の所

よやと云子令前シラ穀升ハ積四十三寸二分ふ

今系升六合六勺許を受ル定額僧食料一人

一升 即六合六勺入〜〜百人一石ヲ受ル

大寶制令のシラ穀升ハ小三斗一石四斗不

〜令系の一石と相應スるを〜〜也是大錡を

送ラりシ〜〜と知ラりシ〜〜と知ラりシ時ハ去子薨後ハ

十二年不〜〜大寶令おれり〜〜これ〜後

不送ラりタる物あり



雷家琴

池中の銘、開元十二年歲在甲子九月五日於  
九龍縣造と云、十八字を二行、小墨ふく記と唐  
人乃真蹟尤奇賞と云、廬、牛毛梅花斷紋乃生  
き、かゝと實子千百十九年の後環海千里の外  
居かゝ、玄宗御宇乃物、對と云、其詳、あはれ、  
皇初昇平の惠澤と云へ、其詳、あはれ、  
既、了、冷木氏乃雷琴圖説、川く、き、た、い、と、  
他

以琴長三尺八寸七分あり、あはれ、  
分、了、終、は、曲、人、乃、九、寸、八、分、強、を、以、く、  
と、真、の、唐、大、尺、あり、國、史、補、云、蜀、中、雷、氏、斲、琴、嘗、  
自、品、第、上、者、以、玉、次、者、以、瑟、  
と、云、以、琴、徽、を、見、終、く、今、子、何、く、  
又、あ、り、何、く、以、恐、く、た、  
螺、蚌、小、あり、  
又、あ、り、  
又、あ、り、

石磬羯鼓

羯鼓録、宋璟善羯鼓、與上論鼓事、云、不、是、青、州、



石末即是曾山花磁云々蘇用石末花磁とある  
 其唐代あり珍奇ときと知へ今世名物  
 と人の賞と於志貴の羯鼓長一尺五寸五分琴田八幡  
 羯鼓長一尺二寸五分大山寺羯鼓長九寸四分太子  
 寺羯鼓長九寸五分の中あり形あり大あり  
長一尺五寸五分  
七寸九分一釐

羯鼓録了以牙林承之とある是林あり紐也は

あまも亦唐代乃物なりとある

洞簫

文獻通考の簫管之制六孔旁一孔加竹膜烏足  
 黄鍾一均之般或謂之尺八管或謂之豎篴或謂  
 之中管尺八其長數也とある依て洞簫の長  
 を校す於て曲尺一尺四寸五分あり東大寺  
實物の洞簫あり古を一尺八寸とある今尺の  
寸法全用し八寸五釐強をあり一尺とす今尺の八寸



五龍也唐調律尺あり即唐代周尺と稱さる尺  
たり東寺に傳へられたる弘法大師將來の宋淳熙  
周尺も亦曲尺八寸又龍ふぶる  
勅編古玉圖譜に古玉洞簫と題さるるを以て  
以管と同じけしは西蕃の洞簫と云物も以管  
と異なりきをしる洞の字を下さる義を洞通無  
底の意たりと云

御帶 御刀子三 青木香

謹く獻物帳を拜見と云る御帶一条緊膜緊ハ筋と

音通みく筋膜と同じ 斑犀角金銅裏鉸具以碧  
犀角の斑の名あるり 絶纏とあり今拜見と云る犀角鉸具と云る損  
失と真珠を糸貫く數十顆又御刀子一口  
大沉香把斑竹鞘金銀莊口及鞘口尾以金鏤口  
邊刃赤紫黒紫緞縮係とありは赤紫黒紫緞の  
縮縮ハ條と同じ條ハをわけたりんり今を換  
編縮繩也と云へり  
失と一口犀角把白牙鞘金銀莊口鞘口尾以金  
鏤口邊刃白組係とありは白組換失と一口犀



角把金銀<sup>ニ</sup>莊口<sup>ノ</sup>水牛角<sup>ノ</sup>鞘白組<sup>ノ</sup>係とあはれも因  
く組<sup>ノ</sup>損失<sup>ノ</sup>以青木香<sup>ノ</sup>貳拾節と<sup>ノ</sup>阿<sup>ノ</sup>於<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>傳  
と<sup>ノ</sup>花鏡<sup>ノ</sup>木香花一名錦<sup>ノ</sup>棚兒<sup>ノ</sup>藤<sup>ノ</sup>蔓<sup>ノ</sup>附<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>  
比<sup>ノ</sup>薔薇<sup>ノ</sup>細<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>而<sup>ノ</sup>繁<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>初<sup>ノ</sup>開<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>每<sup>ノ</sup>穎<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>莢<sup>ノ</sup>極<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>  
甜<sup>ノ</sup>可<sup>ノ</sup>愛<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>是<sup>ノ</sup>紫<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>若<sup>ノ</sup>黃<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>則<sup>ノ</sup>不<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>即<sup>ノ</sup>青<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>  
大<sup>ノ</sup>白<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>味<sup>ノ</sup>亦<sup>ノ</sup>不<sup>ノ</sup>及<sup>ノ</sup>と云<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>見<sup>ノ</sup>在<sup>ノ</sup>と  
る<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>根<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>如<sup>ノ</sup>又<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>集<sup>ノ</sup>說<sup>ノ</sup>補<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>以<sup>ノ</sup>蠻<sup>ノ</sup>產<sup>ノ</sup>船<sup>ノ</sup>  
上<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>謂<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>真<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>以<sup>ノ</sup>葉<sup>ノ</sup>似<sup>ノ</sup>羊<sup>ノ</sup>蹄<sup>ノ</sup>牛<sup>ノ</sup>蒨<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>謂<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>青<sup>ノ</sup>木

香<sup>ノ</sup>是<sup>ノ</sup>乃<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>邦<sup>ノ</sup>漢<sup>ノ</sup>種<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>車<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>又<sup>ノ</sup>以<sup>ノ</sup>馬<sup>ノ</sup>兜<sup>ノ</sup>鈴<sup>ノ</sup>根<sup>ノ</sup>謂<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>  
土<sup>ノ</sup>青<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>以<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>類<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>謂<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>とあふ<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>依  
以<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>鏡<sup>ノ</sup>不<sup>ノ</sup>載<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>者<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>青<sup>ノ</sup>木<sup>ノ</sup>香<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>ふ<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>依

漆革箱

今<sup>ノ</sup>刀<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>玉<sup>ノ</sup>帶<sup>ノ</sup>副<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>表<sup>ノ</sup>黒<sup>ノ</sup>漆<sup>ノ</sup>裏<sup>ノ</sup>朱<sup>ノ</sup>塗<sup>ノ</sup>團<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>紋<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>繪<sup>ノ</sup>  
以<sup>ノ</sup>箱<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>ふ<sup>ノ</sup>是<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>紅<sup>ノ</sup>緑<sup>ノ</sup>縹<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>麗<sup>ノ</sup>錦<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>表<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>  
淺<sup>ノ</sup>緑<sup>ノ</sup>膺<sup>ノ</sup>纈<sup>ノ</sup>裏<sup>ノ</sup>袋<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>い<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>ら<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>袋<sup>ノ</sup>換<sup>ノ</sup>失<sup>ノ</sup>  
ま<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>見<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>緑<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>麗<sup>ノ</sup>錦<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>表<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>緑<sup>ノ</sup>纈<sup>ノ</sup>の



裏川けく<sup>ハ</sup>襦<sup>ハ</sup> 説文了帛二幅、曰襦と云通俗文  
小月帛三幅、曰襦、襦、衣襟也と云  
也<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>机<sup>子</sup>敷<sup>す</sup>、其<sup>ハ</sup>よ<sup>ク</sup>羅<sup>夾</sup>領<sup>單</sup>襦<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>覆<sup>ハ</sup> 襦ハ  
二幅<sup>ハ</sup>み<sup>く</sup>長<sup>六</sup>尺<sup>八</sup>寸<sup>あり</sup> 獻物帳了記  
さ<sup>カ</sup>敷<sup>物</sup>也<sup>ハ</sup>敷<sup>机</sup>の<sup>ハ</sup>襦<sup>ハ</sup>二<sup>幅</sup> 之の<sup>ハ</sup>と知<sup>る</sup>  
緑<sup>綾</sup>帶<sup>二</sup>糸<sup>少</sup>く<sup>結</sup>束<sup>たり</sup> 帶長一丈  
今<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>等  
乃<sup>ハ</sup>去<sup>レ</sup>皆<sup>換</sup>々<sup>と</sup>見<sup>る</sup> と<sup>ハ</sup>か<sup>し</sup>

獻物帳

天平勝寶八年七月八日聖武天皇既昇乃珍也  
金光明寺十八寺了分ち置れ<sup>る</sup>冥助と<sup>ハ</sup>か<sup>し</sup>

ら<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>勅<sup>旨</sup>あり<sup>續</sup>日本紀了天平勝寶八

歳五月乙卯<sup>三</sup> 太<sup>聖武</sup>上天皇崩於寢殿云<sup>廿</sup>壬申奉

葬<sup>日</sup>太上天皇於佐保山陵 崩後十八日<sup>ハ</sup>あり

七月八日<sup>ハ</sup>崩後六十六日<sup>ハ</sup>あり<sup>金光明寺の</sup>  
十八寺<sup>ハ</sup>は<sup>東</sup>大興福元興大安薬師西大法隆  
新薬師太后不退京法華招提法興法起般若南  
淵坂田の十六寺了金光明僧尼二寺<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>加<sup>え</sup>  
十八寺<sup>ハ</sup>あり<sup>藤原仲磨<sup>ハ</sup>大織冠の孫<sup>武智</sup></sup>



磨の次男なり藤原永手は武智磨の弟房前の  
次男長岡大長とヤキ一人は時年四十三巨  
萬福信々續日本紀了高麗朝臣福信も他も賀  
茂朝臣角之々鴨朝臣角足了他も葛木連戸主  
天平勝寶五年四月己亥廿八後五位下葛木連戸主  
授後五位上と何れもあつて後五位下と記を  
去と見れど却て續紀乃誤を多分ては帳僅  
一紙たりと云共國史を補ふたまりと云

不減貝韓櫛

上宮法王廣東蜀江乃御被を納むるに法  
量不物々考ふ所々東院資財條不韓櫛カラヒツ參合一  
長三尺 は韓櫛也 長三尺 廣二尺二寸 は韓櫛也 長二尺二寸  
右天平十四年歲次壬午二月十六日正三位攝  
夫人宅奉納賜者と何れもあつては韓櫛か  
るこゝの編かへ天平十四年の法王減後百二十  
一年ふつて天保十二年より一千百零一年系







寺資財帳ハ寶龜十一年十二月の書ニ  
南州異物志ヲ扶南海有大螺如甌從邊直旁截  
破因成杯形螺體蜿蜒委曲酒在內自注傾覆不  
盡以伺誤相罰為樂と云フ酒の不盡を以て不  
盡貝とも不減貝とも云ゆあり

壺 鐙

上宮法王の御物蘇我馬子乃鐙と云延喜左馬  
寮式の大壺鐙裝束抄乃合洞壺鐙ふと云夫の

本あらず但今々較具と鐙と別々あり  
あり較具と云革也力革と云

鸚鵡形毯代

稱徳天皇御物と云槐記ヲ毯代と云夫法隆寺  
ふあり花毛氈乃扱乃扱乃是也孝謙天皇御  
寄附の品と云り 天平勝寶元年より天平寶字  
二年と十年の際を孝謙天皇  
と稱し天平神護元年と稱し天平  
四年とを稱徳天皇と稱し天平  
小花毛氈と云夫不異あり元隆都刺ハ壽監司



所藏美人織錦圖小題多於詩小君不聞長安市  
上花滿枝東家蝴蝶西家飛籠中鸚鵡喚新主門  
外侍兒更故衣と云も錦紋は鸚鵡形なり證  
ととへ一毳代と一毳の代は困ゆ於は志り衣  
付しありの殿上乃地敷物あり

### 百萬塔

東圓堂は現存と續日本紀に寶龜元年四月戊  
午初天皇八年亂平乃發弘願令造三重小塔一

百萬基高各四寸五分基徑三寸五分露盤之下  
各置根本慈心相輪六度等陀羅尼至是功畢分  
置諸寺と何る志あり余も亦一基を相傳と但  
無垢淨光陀羅尼一卷を置り寶龜元年は唐の  
太曆五年は尚ら天保十三年に至る子は七十  
三年を終り

### 風爐

上宮法王御物と小祿徳天皇の御物と云り



所藏美人織錦圖小題と詩小君不<sub>レ</sub>聞長安市  
上花滿枝東家蝴蝶西家亦籠中鸚鵡喚新主門  
外侍兒更故衣と云も錦紋は鸚鵡形なりと證  
ととへて一巻代と一巻の代は困ゆ故志り衣  
付しあり殿上乃地敷物あり

### 百萬塔

東圓堂に現存と續日本紀と寶龜元年四月戊  
午初天皇八年亂平乃發弘願令造三重小塔一

百萬基高各四寸五分基徑三寸五分露盤之下  
各置根本慈心相輪六度等陀羅尼至是功畢分  
置諸寺とあり志あり余も亦一基を相傳と但  
無垢淨光陀羅尼一卷を置り寶龜元年ハ唐の  
太曆五年小南る天保十三年と至る子。七十  
三年系あり

### 風爐

上宮法王御物と云稱徳天皇の御物と云り



祿德天皇の御物と云々然る人々もや揚萬  
里六一泉を以て雙井茶を煮詩に何時歸上藤  
王閣自者風爐自煮嘗と云々西土も此物有  
と知合し又藥爐と云云

五色絲交幡

天平勝寶六年<sup>甲戌</sup>二月光明皇后の御寄附と云  
光明皇后々續日本紀に天平寶字四年六月乙<sup>七日</sup>  
丑天平應真仁正皇太后崩姓藤原氏近江朝大  
織冠内大臣鎌足之孫平城朝贈正一位太政大

臣不比等之女也母曰贈正一位縣犬養橘宿禰  
三千代皇太后勝寶感神皇帝儲貳之日納以為  
妃時年十六神龜元年<sup>庚申</sup>聖武皇帝即位授正一  
位為大夫人<sup>生</sup>高野天皇及皇太子天平元年  
為皇后崩時春秋六十とあるは勝寶六年ハ皇  
后五十四乃御時たり天保十三年より千〇八  
十九年小かたり

猿頬硯 水注



猿頰硯之形猿頰之似之を以て名之と云宮傳  
王御物と云或は祿徳天皇御物と云埤雅之猿  
性静緩故後從爰とあり硯之磨墨の静緩を欲  
と故之形を爰と云唐庚古硯銘序に硯静  
者也豈非静者壽而動者夭乎と云も思合と云  
水注  
清異録に歐陽通善書修飾文具金苾盛硯滴曰  
金小相と云亦此水注の如きものなるべし

大量

此升方九寸七分深三寸七分積三百四十八寸  
二分三釐三毫今系升五升三合九勺之撮五抄  
を容也南圓堂小布施升と云所り社僧春日  
社冬祭の時此升を以て布施米を量りて之を  
故に名と云も容受合く此升と同法乃一升量  
なり物之時此升量の受る如一斗なり今案に  
此升を蓋大寶令の米升あり大寶升の穀升積



六十二寸又分米升三十七寸五分穀米升三十寸おれと好り

鋸ノコギリ

古史考ノ孟子作鋸とありまじく也正字通ノ鐵葉為齧齧其齒一左一右以片解木石也と云今見る物々石を割ものといふなり

燈臺

上ノ法王御物方物と云た其繪様ノ秘え

考ノ里内裏ノ後乃畫風と云り杜甫詩ノ銅盤燒蠟光吐日と云冬燈ノ如き之のやあらん

金山寺香爐

銘ノ大定十八年戊戌造金山寺大殿於勤前青銅香爐一座臺具都重三十斤八兩棟梁祇毗寺住持三重大師惠琚金山寺大師仁美京主人郎將金令候妻崔氏伊次加女納絲殿前尚乘



府内承旨同正康信鑄成高正とあり大定ハ金  
世宗雍の年號不<sub>レ</sub>々々十八年戊戌と日本<sub>ノ</sub>治  
承二年宋孝宗の淳熙不<sub>レ</sub>有<sub>ル</sub>上宮法王薨後五  
百六十八年今天保十二年より六<sub>百</sub>六十五年  
不<sub>レ</sub>及<sub>ス</sub>青銅之潜確類書不<sub>レ</sub>銅亦<sub>レ</sub>有<sub>ル</sub>青白黄赤紫  
五色青白者為<sub>レ</sub>上<sub>ニ</sub>と<sub>リ</sub>ハ歐陽修の詩<sub>ニ</sub>素絲悲  
青銅不<sub>レ</sub>云<sub>ハ</sub>青銅之銅之上品と知<sub>ル</sub>處<sub>一</sub>坑<sub>ニ</sub>  
說文不<sub>レ</sub>以<sub>テ</sub>泰和灰而髹也一日補坑と云考工記

注不<sub>レ</sub>ハ量名ハカリノナと云香坑の義解とへ<sub>リ</sub>々々今見  
る處タテ臺を失<sub>ト</sub>重<sub>ニ</sub>十斤枝と處<sub>ニ</sub>々々

### 三鼓

藥師寺黒筒寫と云墨記<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>慶<sub>云</sub>法<sub>中</sub>舍利供  
養料足未進張之訖南寺古<sub>ニ</sub>鼓雖<sub>立</sub>々々不<sub>レ</sub>鳴<sub>ク</sub>  
月每度大會之時自他寺借用非無劬勞之如今  
夜時尅令然而出來之糸係冥助之至<sub>ル</sub>喜悅之  
但寺用<sub>ニ</sub>外輒不可<sub>ト</sub>于他處者也延文二年丁酉六



月日注之と十一行の輪記一一方の法隆寺聖  
靈倉料三鼓也藥師寺。願主一鴈推僧都實禪。推  
律師慶祐。作者黑筒字。筆兼吹寺僧。賴盛宗禪房年五十  
住と六行の記より。西大寺資財帳。大唐樂器古  
樂鼓一具一。二。三。大。一。桴。二。と云。又古樂鼓三面  
各納紺細布袷袋  
一二三並彩色腔と云。依月一鼓二鼓三鼓を  
總々古樂鼓と稱す。於と聞佐倭名鈔。月。腰鼓  
俗云三乃豆。羨と云。乃唐書樂志。俗樂革。

有第二鼓第三鼓と見抄。是は唐代の由所見あ  
り。信貴公の三鼓。小は環二川あり。長一尺  
一寸八分あり。腔は淡紅纒縹の雲形あり。

朗詠要集

跋小已上詠數六十七首。博士口傳悉奉授于琳  
弘教禪房。了更不有披露者也。先達等被秘故  
也。又三首奉授者也。正應五年三月日。聖玄判と  
云。今より五百五十一年系の抄本也。信元朗



詠要抄と云書を茲と其奥書小延慶二年八月  
十二日朗詠秘事不殘一曲悉心奉傳善一大德  
因空とあり乞を藤家朗詠と稱と但卅二首か

獵虎紋錦

四天王紋錦旗と云今審定と云騎兵虎を射  
る象ふしく左右射ありしく虎人立しく喫ん  
と云於勢を織成と東大寺寶物琵琶の撥面

唐人虎を射る繪あり大意は圖象と相似り  
獵騎の左右射虎の人立を體大様いくの如  
北史小宇文顯和膂力絶人膂弓數百斤能左右  
馳射と云隋書小宇忻年十二能左右馳射驍  
捷如飛と云宋史高行周為北面前軍都部  
署子懷德從征至戚城被圍數重危重懷德左右  
射縱橫馳突衆皆披靡とあるも晋書載記了劉  
曜圍陳安於隴城安突圍而出遠則雙帶兩韉左



右馳射と云ふと左右射の事の史乘に見えり  
證をり玉海宋熙寧間臧景言馬射六事一曰  
順鬃直射二曰背射三曰盤馬射四曰射親五曰  
野戰六曰輪弄と云順鬃直射ハ手モテあり背射  
ハ馬手メテあり盤馬射ハ射メと云ふなり宋史  
張永德善騎射左右掛十的握十矢疾馳互發發  
必中と云り互發とあはれ左右射ありと論  
皇朝みくも騎射秘抄ハ馬手メありと云ふあり

物を先手メあり手メありを引カたりと云はれ是  
手メあり手メあり手メありを引カたりと云はれ是  
永女三年の跋阿達月日置彈正入道の吉田上  
野介重賢乃家ヲ來リ、明應三年より七十九  
年前の老たる、唯らりなり、是ハ依り、是ハこれ  
と、當時騎射ハ左右馳射の法ありと云ふ能と  
と、虎を射ると、劉向新序ハ楚熊渠子夜行  
見寢石、以為伏虎、彎弓射金飲羽、下視知其石也、



と云、史記、李廣為右北平太守、出見草中石、以  
為虎、而射之、中沒鏃、視之、石也、と云、  
去々魏文帝為虎、所逐、顧射、應敵而斃、魏書と云、  
金、熙宗獵於海島、親射五虎、獲之、金史と云、  
矢直前、虎人立射、洞其喉、史元ふと云、  
此乃以錦紋、も偶然、ふと云、

### 七卷法華經

相傳て太子前生、同朋所持の經と云、一帙、小冊

四字會、有二字、燒てあり、故に燒字、經と云、内題  
妙法蓮華經七卷、一部成とあり、一卷、序品、方  
便品、二卷、譬諭品、信解品、三卷、藥草喻品、授  
記品、化城喻品、四卷、五百弟子受記品、無學人  
記品、法師品、寶塔品、提婆達多品、勸持品、五卷、  
安樂行品、涌出品、壽量品、分別功德品、六卷、隨  
喜功德品、法師功德品、不輕菩薩品、神力品、囑累  
品、藥王品、七卷、妙音菩薩品、普門品、陀羅尼品



妙莊嚴王品普賢菩薩品と合さく一卷と以多經中皆應受持觀世音菩薩與無盡意若有人の十六字を彫餘々幸の經乃如く跋す長壽三年甲午六月一日雍列長安縣李元惠於揚州敬寫此經とあり長壽三年ハ則天武后の年号小く多胡持統天皇八年甲午小南於上宮法王薨後七十三年小書寫き一經なり東院資財條く法華經壹部七卷帙一枚并大唐

者奉請坐法隆寺僧法延と見ゆは者は經を於に

孝仁大德筆法華經

行信僧都の弟子孝仁法師の書寫となりあり。卷末く若夫法海淵曠た壁は波滄慧日高明等斯靈曜受持頂戴福利无邊讀誦書寫は勝業難測是以大法師諱行信平生之日至心發願敬寫法花一乘之宗金鼓滅罪之經般若真空之教瑜伽五分



之法合貳仟柒陌卷經論奉酬納聖

朝退報四恩兼救群品然假體如浮雲革命似電  
光未畢其支含玉從化弟子孝仁尊不勝風樹之  
傷敬辨先願掛畏聖

朝金輪之化與乾坤无動長遠之壽爭劫石弥堅  
弥遠退願篤蒙四恩枕涅槃之山菩提之樹位成  
灌頂力奮降魔廣及法界六道有識離苦得樂者  
登覺道道神護景雲元年九月五日敬奉書寫竟

とあり天保十二年と一千零七十六年不及人  
大法師行信々天平勝寶六載十一月下野藥師  
寺小配流きりゆく中續日本紀了見也

東坡墨竹畫

一枝翅竹度湘沔萬里行人感別魂知是娥英廟  
前物遠隨風雨送啼痕 軾 娟 蒼筤如碧玉  
癯然出塵淡無欲春風不赦籜龍寒風雨萬竿臥  
空谷 與可文同 東坡先生蘇軾景祐三年十



二月十九日生建中靖國元年七月廿八日卒行  
年六十六皇朝堀河院乃康和三年小治天保  
十二年方七百四十二年前なり

惡魔降出面

永仁四年七月七日諸總源信氏作と云墨記の  
日朱ふく塗了額鼻頭ビクビクと云川子折水ふぬく他  
りり還城樂面と云と也角と牙とをえ是月如  
行何らん 還城樂乃面了也  
角と牙とふ

簪カササシ

上宮法王幼時玩弄乃物と云定國法印好見  
て

清氏を片ましく何けまきく乃程かきく花乃簪  
りり教えまきくと福まきくをひく考ふ是は五百  
年衣既く貴重乃靈寶たりしと知へし但簪カササシ  
鈿頭花カササシ乃字の正しきと云く挿頭花カササシ乃俗字ふふ  
く漢語鈿カササシ乃の魚子ハ川鈿頭花乃金華まきく



其髻華<sup>ウツス</sup>とのみ髪を結く渦卷<sup>ウヅマキ</sup>を<sup>ウツス</sup>きしきへと<sup>ウツス</sup>し  
く<sup>ウツス</sup>なり<sup>ウツス</sup>る<sup>ウツス</sup>は<sup>ウツス</sup>受<sup>ウツス</sup>ハ<sup>ウツス</sup>景<sup>ウツス</sup>行<sup>ウツス</sup>天<sup>ウツス</sup>足<sup>ウツス</sup>紀<sup>ウツス</sup>したく<sup>ウツス</sup>と<sup>ウツス</sup>出<sup>ウツス</sup>る  
面<sup>ウツス</sup>く<sup>ウツス</sup>る<sup>ウツス</sup>乃<sup>ウツス</sup>白<sup>ウツス</sup>檀<sup>ウツス</sup>の<sup>ウツス</sup>え<sup>ウツス</sup>を<sup>ウツス</sup>う<sup>ウツス</sup>む<sup>ウツス</sup>に<sup>ウツス</sup>と<sup>ウツス</sup>し<sup>ウツス</sup>て<sup>ウツス</sup>の<sup>ウツス</sup>子  
と<sup>ウツス</sup>よ<sup>ウツス</sup>め<sup>ウツス</sup>る<sup>ウツス</sup>を<sup>ウツス</sup>き<sup>ウツス</sup>終<sup>ウツス</sup>は<sup>ウツス</sup>上<sup>ウツス</sup>宮<sup>ウツス</sup>法<sup>ウツス</sup>王<sup>ウツス</sup>より<sup>ウツス</sup>入<sup>ウツス</sup>百<sup>ウツス</sup>年<sup>ウツス</sup>初<sup>ウツス</sup>に  
け<sup>ウツス</sup>物<sup>ウツス</sup>あり<sup>ウツス</sup>し<sup>ウツス</sup>と<sup>ウツス</sup>知<sup>ウツス</sup>ぬ<sup>ウツス</sup>を<sup>ウツス</sup>け<sup>ウツス</sup>る<sup>ウツス</sup>終<sup>ウツス</sup>分<sup>ウツス</sup>時<sup>ウツス</sup>は<sup>ウツス</sup>既<sup>ウツス</sup>并<sup>ウツス</sup>お  
し<sup>ウツス</sup>い<sup>ウツス</sup>り<sup>ウツス</sup>て<sup>ウツス</sup>何<sup>ウツス</sup>も<sup>ウツス</sup>ひ<sup>ウツス</sup>は<sup>ウツス</sup>膳<sup>ウツス</sup>妃<sup>ウツス</sup>等<sup>ウツス</sup>の<sup>ウツス</sup>服<sup>ウツス</sup>沛<sup>ウツス</sup>乃<sup>ウツス</sup>物<sup>ウツス</sup>た<sup>ウツス</sup>る  
ありし

上宮疏原本四卷

法華經乃疏上宮法之乃著述と云皇綱みく外  
著の書は返御下と云一は乞去をひく首と云  
黄紙の書一本軸を貼と東院資財條に法華經  
疏肆卷正奉者袂一枚著牙律師法師行信覓<sup>モトメ</sup>求  
奉納者右者上宮聖德法王御製者と何處及娘  
よりけ寺にありしに云何と云行信法師乃求  
めく納りしより今も傳る終と既る子有條身  
了及人相傳交割乃嚴あると推く知へし  
但別  
子唐



沙門吉釋藏選の法華經義疏四卷あり

不名取水火取玉

上宮法王幼稚の時乃御物と云定園法印好見  
志く不名取の玉也

ワと終と片我大哀よそそかく物おとりの

あこれ親の 水火取玉也 水精琥珀玉也

局とてかき迷ひ悟り玉白玉乃火を玉水也

もとあつらんや

不名取乃戲オホシ今も小児乃為オホシとありて法オホシ

種あり不の數廿六ありしふ多へし今た

十六を存ん

善光寺如来御書

上宮法王善光寺如来と贈答の御書と云太子

御書ハ信濃國善光寺小菴より由云走湯山小

も上宮法王より走湯山へ送り終り御書何

ふり縁起しそそたり皇太子御封を付り終



て開くありとせし許されしと云慶長十一年の記  
了此也其御書も從<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>任<sub>ヒテ</sub>初畫不見之遺<sub>ニ</sub>戒<sub>ニ</sub>更  
不許好見及後代有<sub>レ</sub>邪見人開之<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>遁<sub>ニ</sub>背<sub>ニ</sub>  
勅命過<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>也慶長十一年丙午八月十七日旅少僧  
於長乘權律師光祿會伍師實秀片桐市心且元  
奉<sub>レ</sub>行 下代官使高橋義吉<sub>ニ</sub>判梅戶平右衛門  
判と何の片桐東市心且元ハ龍田小佐一<sub>ニ</sub>一萬  
二子不在領<sub>ニ</sub>也

貝葉梵文

高橋隆羅尼般表心徑等<sub>ニ</sub>書<sub>ニ</sub>定<sub>ニ</sub>因<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>印<sub>ニ</sub>好<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>  
志<sub>ニ</sub>

何<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>誰<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>け<sub>ニ</sub>ん<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>何<sub>ニ</sub>と<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>の  
比<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>け<sub>ニ</sub>か<sub>ニ</sub>ら<sub>ニ</sub>り<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>貝<sub>ニ</sub>葉<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>翻<sub>ニ</sub>譯<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>義<sub>ニ</sub>集<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>多<sub>ニ</sub>  
羅<sub>ニ</sub>舊<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>則<sub>ニ</sub>多<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>翻<sub>ニ</sub>岸<sub>ニ</sub>形<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>此<sub>ニ</sub>方<sub>ニ</sub>梭<sub>ニ</sub>欄<sub>ニ</sub>直<sub>ニ</sub>而<sub>ニ</sub>且<sub>ニ</sub>高<sub>ニ</sub>極<sub>ニ</sub>  
高<sub>ニ</sub>長<sub>ニ</sub>八<sub>ニ</sub>九<sub>ニ</sub>十<sub>ニ</sub>尺<sub>ニ</sub>華<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>黃<sub>ニ</sub>米<sub>ニ</sub>子<sub>ニ</sub>西<sub>ニ</sub>域<sub>ニ</sub>記<sub>ニ</sub>云<sub>ニ</sub>南<sub>ニ</sub>印<sub>ニ</sub>建<sub>ニ</sub>那<sub>ニ</sub>  
補<sub>ニ</sub>羅<sub>ニ</sub>國<sub>ニ</sub>北<sub>ニ</sub>不<sub>ニ</sub>遠<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>多<sub>ニ</sub>羅<sub>ニ</sub>樹<sub>ニ</sub>林<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>葉<sub>ニ</sub>長<sub>ニ</sub>廣<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>色<sub>ニ</sub>光<sub>ニ</sub>潤<sub>ニ</sub>



諸國書寫莫不采用と云法隆寺圓成院記了け  
堂萬壽四年丁卯九月六日一萬花供闕依器上  
雨多羅葉処也空智上人住也也南寺東室一室  
住僧也尊勝陀羅心徑十二摩吒廿五體文注  
青絲<sup>キ</sup>貫也と何るもの形か

鏡

一面徑一尺五寸少強素鼻北月小海中五神山  
鑄出以淵鑑類函子渤海之東有大壑中有五山

岱輿負嶠方壺瀛洲蓬萊臺觀皆金玉所居之人  
皆仙聖之種五山之根無所連着常隨波上下往  
來不得暫時と何れもの小や晋東宮舊事に皇  
太子納妃有著衣大鏡尺八寸銀華小鏡一尺二  
寸と何れは鏡の著衣大鏡と云へし鏡一  
尺五寸は一尺八寸小も是は今尺八寸四分餘  
を以て一尺と以て鄭世子朱載堉の鏡と云  
夏尺と同し晋代の尺八寸ハ今尺の  
一尺三寸六分八釐許也



一徑八寸八分素鼻伯牙鍾子期山林三面堂竹  
欄を鑄出<sup>ソコ</sup>一<sup>ソコ</sup>邊<sup>ソコ</sup>獨有<sup>ソコ</sup>幽棲地山亭暗女蘿洞清  
長依篠池開半卷荷野花朝暝落盤根歲月多停  
杯無<sup>ソコ</sup>嘗慰峽鳥自<sup>ソコ</sup>徑過の四十字あり  
一徑九寸二分素鼻<sup>ヤツクハナカク</sup>八圓華<sup>ソコ</sup>一<sup>ソコ</sup>全身雲龍化

鑄出

竹樹

篤竹<sup>ス</sup>少<sup>ク</sup>々<sup>ク</sup>他<sup>ニ</sup>上宮法王御物と云東院資財條

小合<sup>セテ</sup>厨子肆足貳<sup>ニ</sup>咫竹長<sup>サ</sup>各二尺五寸廣<sup>サ</sup>各一  
尺四寸高二尺著<sup>ツク</sup>各鑲子納基師法華徑疏文具  
文廿卷也法師行信之所集也右奉納大僧都行  
信師と何<sup>カ</sup>かもの形<sup>カ</sup>か



甲斐國人  
栗原信克筆



